

夜雨音色（やしゅうねいろ）

夜に落つ涙の雨音は
愛しい人の悲しい涙音
男の部屋へと叩く鈴音
逢えない想い怨み涙音
女の性の哀れ叫び音色

夜に落つ涙の雨音は
愛しい人への想い音色
男は部屋で耐える哭音
幸せ願ひ噎び泣き涙音
男の哀れ叫び斬る音色

夜に落つ涙の雨音は
男と女の哀れな響き音
女と男の哀れな道行色
凡て流せと諦めの音色
男と女が情を分る哭音

2000/End draft

霧雨音色（むしゅうねいろ）

夜の街路に木霊する靴音
霧雨が情を濡らし
男と女がコツコツと
揺れ響かせて歩いている

互いに喋ることもなく
男は疲れきって
女は諦めきって
お互いに傘をさし
並木道を歩いて行く
霧雨の中を歩いている

遊歩道に響く靴音が
外灯に照され
見果てぬ互いの音を絡ませ
男と女が歩いている

2000/End draft

残り雨

男と女は悲しいね
男は夢を失い
女は夢を描き

男と女は哀れです

秋雨は淋しいね
夢をなくした男と
明日を待っている女と
秋雨は寒いです

男も女も哀れです
男は無口で
女を抱いて
男も女も淋しいです

2019/End draft

あまおと

女の顔は青白なって
男の顔も白づいて
お互いに無口色で
男も女も哀れ色に染まって

秋雨は寒色です
夢色を冷まさせ
男と女は昔を恋し

まだ幼い日々のあの時を

女は人生に醒めて
男は黙って傘を差す
相合い傘の男と女へ
氷雨混じりは悲しい雨色

2000/End draft

男と女

女は男を
信じられなくなった
男も女を
信じられなくなった

人が人を
信じられなくなると
顔の形まで
変ってしまうのですね
女も変ったし
男も変った

男と女はお互いに
帰らぬ日々を振り返り
戻らぬ思いへ恋い焦がれ
なくした心に涙を流す

2000/End draft

男と女 (二)

女は Eye Shadow を
Manicure を塗り
男は疲れて
黙って待っている
いつしか目で語りだし
言葉を失った
女と男は哀れです

灯りに照された
女と男の笑い顔に
むつろな声が響きは
風に流されて
街を吹かれ過ぎる
Manicure の手が動き
EyeShadow が光り
女は灯りに流されて
男も夢に流されて

いつか男も女も戻らぬ
橋を渡っていた

2000/End draft

男と女 (三)

恋の流れの行き先は
女の泪の止むる時
刃物の悲しい血の匂い
一度の生きの悲しさよ

戻らぬ旅路の門出ゆえ
衣裳化粧の儚さよ
生きてかなわぬ幸せを
月の明かりが照らしている

祭りの夜の路地裏通り
風が吹いて流れ行く
吠えたい生きの人の世を
ぐいっと心に沈ませて
旅路の女の幸せを
一途に祈る悲しさよ

男と女は哀れなり
女と男は悲しいなり

2000/End draft

旅立ち

女の身体は柔らかく
男の流す涙を
優しく受けとめ
男を抱いて
母のように包んでくれる

男は幾つになっても
子供ですの
女の乳を吸いながら
見果てぬ夢を
追い求めるものです

でも男は知っている
女と別れる日を
男はいつだって
母からは
独立していくものですので

2000/End draft

通い道

世間を知った女は
男を餌にしてね
男は女のそういう
力に抱かれるものです

それはそれで良いのですがね
いつかは抜き差し
ならなくなってしまうして
男も女も刃物の日々が
三昧をおくるようになってしまいました
互いに刺し違いたままで
死んでくれればよいのですが
世の中そんなには
簡単に甘くはないようです
生き残った男の道も地獄なら
生き残った女の道も地獄路です

今度こそやり損なわず
男と女は殺し合う
永遠に目を瞑るために
二度と眼を開かないために

2000/End draft

夜叉

夜叉よ愛しているのなら
この私を殺せるというのか
憎んでいるのなら
この私を殺せるのか
私のこの命を
みごと散らせることが
出来るというのか

何時でもいいよ
私を刺してごらん
私がどうでるか
私もそれを知りたくてね
むしろ夜叉になつて
あなたが狂う方が
私は怖い
狂ったお前を
抱き締め愛撫する
おのが心が怖い
狂ったお前の愛撫が
心に染み込む方が
私は怖い

窓明かり

夜叉よ愛しているのなら
この私を殺せるのか
憎んでいるのなら
私を殺せるというのか
私のこの命を
みごと散らせて欲しい
夜叉よ散らせて欲しい
2000/ End draft

しあわせを逃がした
おとこは何処へ行くのでしょ
しあわせを掴み損ねた
おんなはどうするのですよ
一家団欒の窓灯かりを
眩しく眺めて佇んで
足元に落ち葉がまとわりつき
行く場所も無い戸惑いを
男も女も夜風に流している

踏み違えた己の道を
屋台の酒で紛らわせ
酔えた匂いが中で
無かったしあわせの夢へと

心が微睡み男も女も
束の間の温もりに浸る

幸せを掴み損ねた
男は死に場所を求めて
幸せを逃がした
女も死に場所を求めて
死に切れずに生きている
人の幸福をただ眺め
身に吹く冬の風へ
そうであつたしあわせを
かすかに夢に炊き
木枯らしがそれすらも
消さっていく

2000/ End draft

鮮血

雲間に出る紅の月が
女の白い両の手を
真っ赤に染めさせるなら
男はどうすればよい
ただ見ているだけか
いやなさせるままか

それもよいだろう

月の明かりに光る
刃物の冷たきを見るのも

唯一心配なのは
女が間違はなく
殺してくれるかである
やり損なって
生きるはいやだ！

死に切れない己の
姿を見るのは嫌だ

紅の月が雲に隠れ
女の手が鮮血に散ったとき
死に切れないことを恐れて
鮮血の手を握ったまま
己を殺し続けるだろう

2000 / End draft

なみだ

涙が月夜に光り
生きる力を
無くし始める

生きが絶えたのなら
二人とも
永遠の幸せを
掴むというのだろうか
死んだら
花が咲くというのか
生きて咲くことのない花を
無言の死体となれば
咲くというのか

男の安堵の顔が
月の明かりに照らされて
女の化粧も照らされて

息せぬ二人の道行きを
月の明かりが照らしている
生きて掴みたかった幸せか

寒夜に吹き来る冷え風が
男と女の
咲かなかった花を
吹き去って
来し方行く末へ消えて行く
祈りの闇へと去っている

2000 / End draft

All End.